

<研究ノート>

OCP 学生スタッフによる学生意識調査報告

— 実践科目で学んだものとは —

金久保紀子*・馬場 裕**・武田 直樹***

A Report of Attitude Survey of OCP by OCP Student Staff

— What do students learn by OCP? —

KANAKUBO Noriko *, BABA Hiroshi ** and TAKEDA Naoki ***

1. はじめに

筑波学院大学では平成17年度から、「社会力」¹⁾の育成を教育目標に掲げ、「オフ・キャンパス・プログラム」(Off Campus Program 以下OCP)に取り組んでいる。これは、つくば市全体をキャンパスと捉え、学外(オフ・キャンパス)活動として、様々な社会参加活動を行うことで、大学生であると同時に、社会の一員として必要な力を育てていくことを目的とした教育プログラムである²⁾。

OCPでは、学生の視点をプログラム運営に盛り込んでいくことを目的として、学生の組織である「OCP学生スタッフ」がプログラム運営に参画している³⁾。

OCP学生スタッフは活動の一環として、平成18年度、平成19年度に、「OCP学生スタッフによる実践科目アンケート」によって、OCPでの活動における学生の意識調査

を行った。これは、プログラムの実践者である学生自信が、学生に対して調査を行うことで、より現実味のある回答が得られることと、それによってプログラムの改善や発展に、学生のことで提言を行うことを目的としたものである。本稿では、平成19年度「OCP学生スタッフによる実践科目アンケート」の結果をまとめ、実践科目で学生が得られたものは何であるのかを整理し考察を行う。また、それに伴って、社会力コーディネーターが調査結果をいかにプログラムに反映させたのかについて報告を行い、次いで、OCP学生スタッフの視点から、改めてOCPの特色と、教育プログラムとしてOCPが学生にどのように作用しているのかの考察を行うことを目的とする。

* 情報コミュニケーション学部国際交流学科、Tsukuba Gakuin University

** 情報コミュニケーション学部国際交流学科4年、Tsukuba Gakuin University

*** 筑波学院大学社会力コーディネーター、Tsukuba Gakuin University、

2. 平成18年度 OCP 学生スタッフによるアンケート実施結果

OCP 学生スタッフは平成19年 1 月に、平成18年度に実践科目 A・B⁴⁾で活動を行った学生を対象にして、OCP 学生スタッフ作成のアンケートによる活動終了後の意識調査を実施した。

この調査のねらいは、

- ①実践科目から学生は何を学んだのか
 - ②学生は今後どのようなことを OCP に期待しているのか
- の 2 点を明確にし、OCP 学生スタッフはどのような対応ができるのかということを導き出すことであった。

その結果、実践科目の活動に対し、「プラスにならなかった」と否定的な評価をした回答者は30%弱にとどまり、約70%の回答者が「得るものがあった」と好意的な評価しており、全体的に学生の満足度の高いプログラムであることがわかった。

一方で、「自分の意思で参加した活動でない」と得るものが少ない」という傾向がみられた。これは、実践科目での活動を選ぶ際に、より自分のためになる成果を挙げるということを目指す上での重要なポイントであると考えられる。OCP 推進会議⁵⁾での報告や、学内掲示板への掲示を通して、学生、教員並びに社会力コーディネーター⁶⁾に活動を選ぶためのひとつの指標として提示された。

この調査結果は、OCP 学生スタッフにとっても、学生の満足度をより高めていくためには、どのような活動ができるのかという点で大きな手がかりとなった。また、同調査を毎年継続して行っていくことで、傾向の裏付けを行い、そのうえで新しい傾向を探っていく必要があることを確認した。さらに、各学年に対応するアンケートの作成、また学年別の傾向を反映することのできる集計方法の検討を課題とした⁷⁾。

3. 平成19年度意識調査概要

平成20年 1 月には、平成19年度実践科目 A・B・C の活動終了後の意識調査を行った。この調査では、前年度より詳細な分析を行うために、各設問項目での回答の関連性を重点的に分析することとし、前回のアンケート項目に以下のような改良を加えた。

●設問の回答を選択式にする

平成18年度調査の自由記述から回答を精選し、それをもとに、各設問につき 5～16 個の選択肢を設け、該当するものを選ぶ形式とした。

これによって、大枠でしか捉えられていなかった学生の意識をより具体的に分析することができる。また数値的な集計ができることで、学年別の傾向をはじめ、「活動に前向きであった者の傾向」、「活動に前向きでなかった者の傾向」などの条件に対して、精度の高い集計結果を得ることができる。

●アルバイトと実践科目との比較

平成18年度調査では、学生の半数がアルバイトをしていることがわかっており、「アルバイトを通して「社会力」をつけることができる」という内容の回答が多くみられた。それを受け、学外（オフ・キャンパス）で活動を行うという共通点がある両者を、学生が、それぞれどのように捉えているかを分析・比較することで、教育プログラムとしての OCP の成果や、課題を違う視点から捉えなおすことができるのではと考えた。

そこで、平成19年度調査では、「実践科目で得られたもの」の設問に対応する形で、「アルバイトで得られるもの」の設問を設け、両設問同一の選択肢の中から、それぞれに該当する回答を選択することとした。これによって実践科目で得られるものと、アルバイトを通して得られるものの比較調査を行うの

と同時に、学生が、アルバイトを通してどのように社会と結びついているのかという考察を行う。

●自己評価とプログラム評価

平成19年度調査では、自身の活動を行う上での準備や、目標達成に対して5段階評価による自己評価と、提供されたプログラムの内容や対応について5段階評価によるプログラム評価の設問を設けている。

平成18年度調査では、「楽しかった」・「つまらなかった」、また「得るものがあった」・「プラスにならなかった」という、活動に対する感想を中心にプログラムの満足度を測っていた。平成19年度調査では、これに自己評価・プログラム評価の結果を照らし合わせながら、それぞれの感想を得るに至った理由や、原因の要因を探る。

4. 意識調査のあらまし

目的：①実践科目から学生は何を学んでいるのか

②学生が OCP に期待するものは何か

③実践科目とアルバイトで得られるものの比較調査

調査対象：筑波学院大学 1年生・2年生・3年生（実践科目 A・B・C 履修者）

調査時期：平成20年1月21日

調査方法：実践科目学年報告会時に調査票を配布し、記入後、OCP 学生スタッフがその場で回収を行った。その後 OCP 推進室にて OCP 学生スタッフが集計を行う。報告会欠席者については、追跡しての調査は行っていない。

主な調査事項は次の通りである。

1) 実践科目について

2) 活動を終えての自己評価

3) プログラム内容に対する評価

4) アルバイトについて

5) アルバイト以外の学外活動について

6) 自由記述

調査票回収率：

1年生（全119名）出席者 81名中 77名から回答が得られた。回収率95%

2年生（全215名）出席者152名中118名から回答が得られた。回収率78%

3年生（全204名）出席者156名中103名から回答が得られた。回収率66%

平成19年度調査の結果及び考察の報告は、OCP 学生スタッフによって、学内の OCP 推進室会議、学外のアドバイザーの方々を交えての OCP アドバイザー会議の場で行われた。

5. 調査結果

5. 1 実践科目について

5. 1. 1 実践科目の感想 (図1)

実践科目の活動後の感想を問い、全学年の回答をもとに、学年別の回答の傾向を導き出すための比較を行った。

全学年では、80%の回答者から好意的な評価が得られた。「楽しかったし何か得たものがあった」(63%)「楽しくはなかったが何か得られた」(17%)一方で否定的な評価は17%であった。「楽しかったが自分のプラスにならなかった」(10%)「つまらなかったし自分にプラスにならなかった」(7%)学年別にみると、「楽しかったし、何か得たものがあった」と、最も好意的な評価をした回答者の割合は、実践科目 A では61%、実践科目 B では71%、実践科目 C では56%という結果となった。(図1)

必修科目であるにも関わらず好意的な評価が高く、非常に多くの学生に受け入れられていることがわかる。

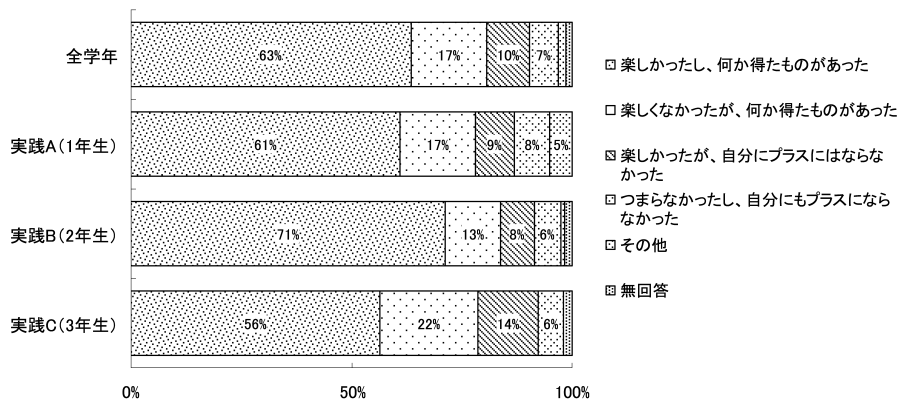


図1 実践科目の感想

また、平成18年度調査における同質問の回答と比較して、好意的な評価（70%）に10ポイントの上昇がみられた。これは、OCP推進室主導のもと、プログラム全体の体制が整備され、プログラムとしての完成度が高まったことで、学生がより活動しやすくなった結果と考えられる。

学年別の回答の推移に関しては、実践科目A・Bは受け入れ団体⁸⁾での活動が中心であるため、受け入れ団体の十分なサポートのもとで、学生が目標にしている成果を得ることができる。実践科目Aより活動時間の長い実践科目Bでは、より多くの成果を得られていることがうかがえ、それが好意的な評価の10%の上昇に表れている。

一方で、実践科目Cの好意的な評価が実践科目A・Bに対して低いことについては、実践科目Cが、個人または、少数のグループで自主企画・運営を行う活動であるため、非常に達成感のある成果を得ることができる学生がいる反面、十分なサポートが得られなかったり、企画が思うように進まなかったりと満足度のいく成果が得られない学生もみうけられる。学生によって活動に対する満足度の差が大きいことが、回答に反映されたと考えている。

しかし、同時に「楽しくはなかったが、得

るものがあった」とした回答者の割合は実践科目Cが22%と全学年で一番高く、成功したことや楽しいこと以外の経験も自分にプラスであると考えている。失敗からも学ぶという姿勢がうかがえる。

5. 1. 2 実践科目の活動を選んだ理由 (図2)

実践科目の活動を選んだ理由を問い、全学年の回答をもとに、学年別の回答の比較を行った。

全学年では、「興味がある分野」(20%)、「楽しそう」(14%)、「体験したことのない分野」(10%)、「場所・時間があっていい」(8%)の順で回答があった。

学年別の傾向としては、全学年でみられた傾向と共に、実践科目Aでは「楽しそう」(18%)、「簡単そう」(11%)、「友達に誘われて」(10%)の割合が高学年に比べて高く、一方で実践科目B・Cでは「知識・技術を身に付けたい」、「自分のためになる経験」の割合が高い。(図2)

なお、以降のグラフ(図2-5)は実践科目Aから実践科目Cへの推移が分かり易いように、実践科目Aの回答が多かった順に合せて回答項目を配置している。

全学年を通して、活動を有意義なものにし

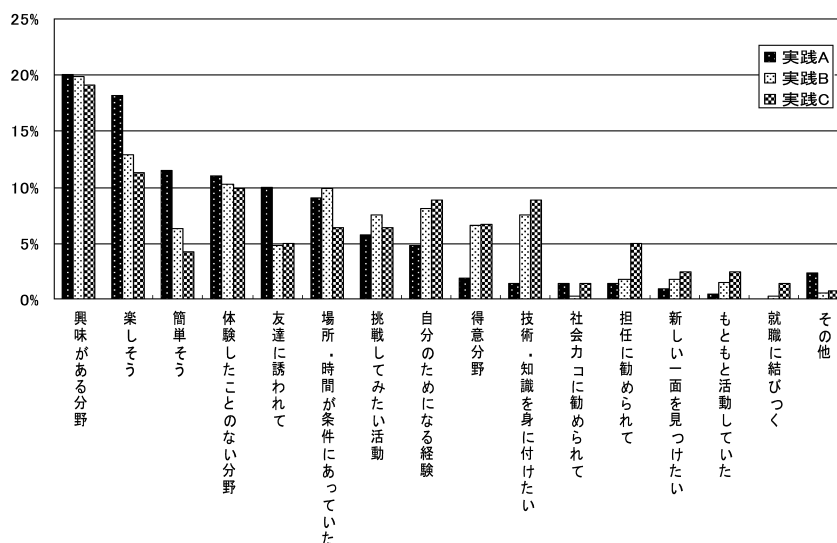


図2 実践科目の活動を選んだ理由 (学年別)

たいという姿勢や、活動を通して得られる体験に対する期待が表れている。一方で、「場所・時間が条件にあった」(8%)が上位3項目に次いで回答されており、学生が、実践科目の活動と、日々の学生生活とのバランスをシビアに捉えている面もうかがえる。

学年別の傾向としては、実践科目Aでは楽しいこと、簡単なことが活動を選ぶ上での基準となっているのだが、実践科目B・Cになると、自主性が必要とされること、自分のためになることが選択の基準になっていく様子がよく表れている。学年が上がるにつれ、自分を高めることに意識が向き、それが活動を選ぶ理由となっている。

また平成18年度調査では20%の回答があった「友達に誘われて」が、実践科目B・Cで5%の回答と大きく減少している。同様に「担任に勧められて」(3%)、「社会力コーディネーターに勧められて」(1%)の回答も極めて少なく、これは、平成18年度調査から得られた「自分で決めた活動でない」と得るものが少ない」という意識が学生に浸透したこと、社会力コーディネーター、並びに担任

教員が「最後は学生に自分で決めさせる」という方針を徹底した結果であると考えている。

5. 1. 3 実践科目の活動を通して得られたもの (図3～5)

平成18年度調査の同質問では、①人とのつながり(コミュニケーション)(50%) ②実績・経験(23%) ③知識・技術(13%)の順で回答が得られた。

平成19年度調査では、その内容を明らかにするために、より具体的な分析を行うことを目的とした。そこで、平成18年度調査の自由記述から精選した40項目程度の回答を、①技能・能力、②精神面、③コミュニケーションの3分野に分け、各分野に13項目ずつ選択肢として配置した。その中から、「実践科目の活動を通して得られたもの」として、各分野で該当するものを3つまで回答する形式とした。

全学年では、各分野で

①技能・能力:「知識・技術」(17%)・「状況判断する力」(15%)

②精神面：「責任感」(16%)・「達成感」(16%)
 ③コミュニケーション：「普段関われない人との出会い」(22%)・「仲間との連帯感」(15%)が上位に回答されている。

学年別の回答の傾向を分野別にまとめる。

①技能・能力面では、

実践科目 A：「常識・社会マナー」(19%)、「状況判断する力」(17%)、「知識・技能」(15%)

実践科目 B：「知識・技能」(17%)、「常識・社会マナー」(14%)、「状況判断する力」(13%)

実践科目 C：「計画を立てる力」(18%)、「知識・技能」(17%)、「状況判断する力」(16%)の順で回答があった。(図3)

②精神面では、

実践科目 A：「達成感」(19%)、「責任感」(17%)、「協調性」(15%)

実践科目 B：「達成感」(18%)、「責任感」(17%)、「仕事の大変さ」(12%)

実践科目 C：「責任感」(15%)、「協調性」(13%)、「達成感」(13%)、「仕事の大変さ」(13%)

の順で回答があった。(図4)

③コミュニケーション面では、

実践科目 A：「普段関われない人との出会い」(22%)、「年上の人への対応」(14%)、「自分の世界が広がった」(13%)

実践科目 B：「普段関われない人との出会い」(23%)、「仲間との連帯感」(14%)、「年上の人への対応」(13%)

実践科目 C：「普段関われない人との出会い」(21%)、「仲間との連帯感」(17%)、「自分の世界が広がった」(17%)

の順で回答があった。(図5)

学年別に回答の傾向が異なり、実践科目 A・B・C 各活動の特色がよく反映された結果となった。

①技能・能力面での傾向をみてみると、一回体験型の実践科目 A では「常識・社会マナー」、「挨拶・敬語」など、社会生活における基本的なことを得たとする回答が多い。活動時間の増える実践科目 B になると、「知識・技術」のように活動を通しての実質的な力の上昇を意識した回答に加え、「計画を立てる力」の回答も増えている。さらに活動時間が増え、自主性が必要とされる実践科目 C で

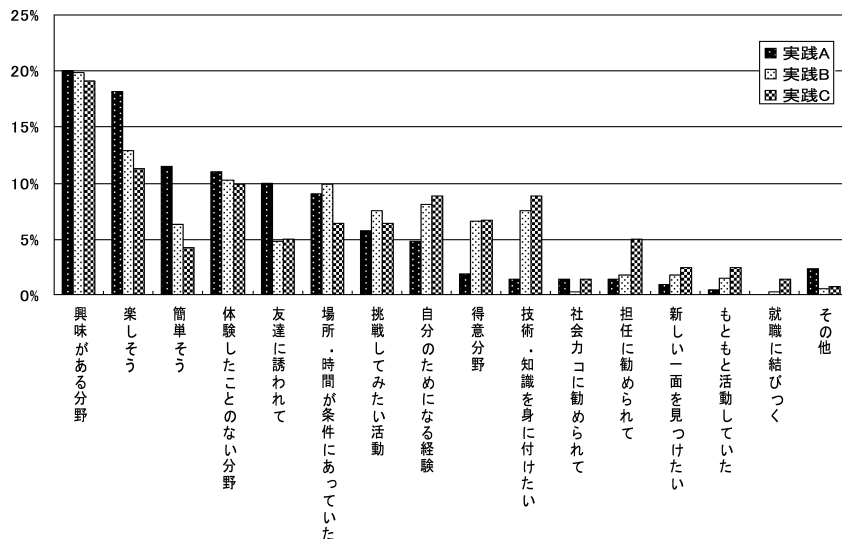


図3 活動を通して得られたもの ①技能・能力

は、回答の中心が「計画を立てる力」、「時間管理」など、自主企画を進めていく力に移る一方で、「常識・社会マナー」、「挨拶・敬語」などは既に定着しているためか、あまり回答がなされない。

②精神面では、実践科目 A、B で「達成感」が多く回答されたのに対し、実践科目 C では「達成感」よりも、責任感や協調性が重視されている。実践科目 C では、自主企画での活動という特徴が出て、達成感に結びつかな

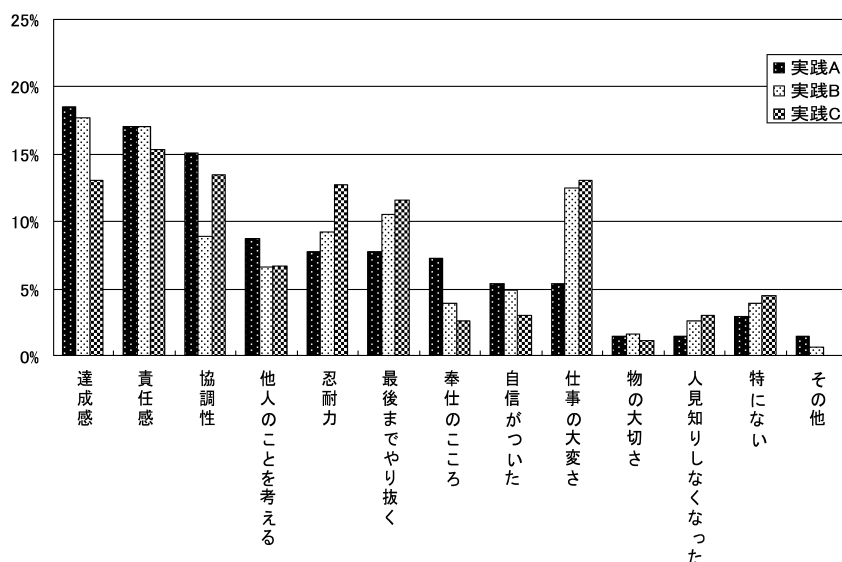


図4 活動を通して得られたもの 精神面

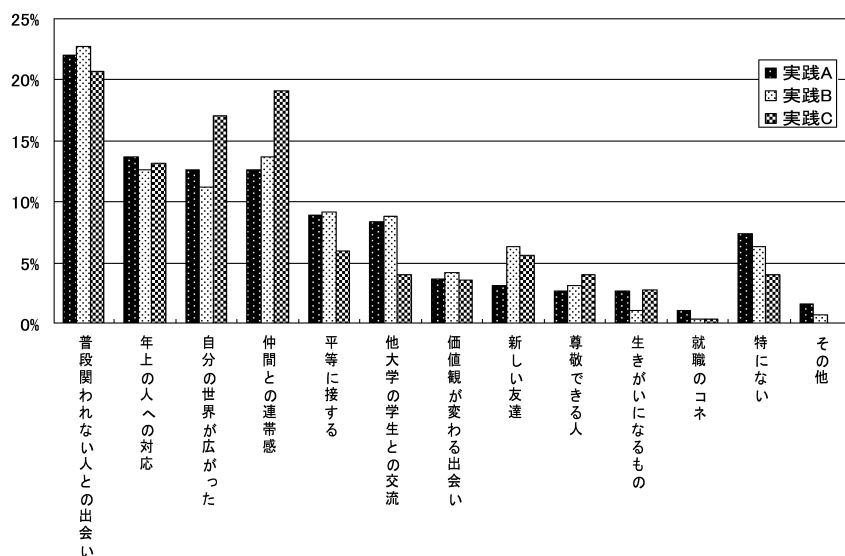


図5 活動を通して得られたもの コミュニケーション

かった学生の割合が多いことが推測できる。その一方で、「忍耐力」、「最後までやり抜く」の回答は実践科目Cが一番多く、成果だけに注目するのではなく、そこに至る過程からも学ぶ姿があることがうかがえる。

また実践科目Aではあまり回答されなかった「仕事の大変さ」が、継続的な活動を行う実践科目B、Cで多く回答されたことも、活動時間との関係があり、妥当性のある結果である。

③コミュニケーション面では、全学年に共通して「普段関われない人との出会い」の回答が多く、活動の意義を人との出会いに感じていることがわかる。同時に、多くの学生が、実践科目で活動やその場を、「普段」にはなかったものとして捉えていることもわかる。

また、実践科目Cで「自分の世界が広がった」が多く回答されている。これは、受け入れ団体がサポートを受けながら活動を行っていた実践科目A・Bから進歩し、実践科目Cで地域社会に対し自主企画を運営していく中で、その活動範囲の広がりを通して、自らの世界の広がりを実感していることがわかる。

いずれの分野でも、実践科目A「体験する」、実践科目B「学ぶ」、実践科目C「試す」というステップアップに基づいて学生が成長していることが回答に反映されており、各活動の目的と目標を学生がよく理解して活動している結果が表れている。

5. 1. 4 社会力についての意識 (図6)

実践科目の活動を通して「社会力」が果たしたかの意識を問い、全学年の回答をもとに、学年別の回答の傾向を導き出すための比較を行った。

全学年の58%の回答者が「社会力がついた」と回答しており、半数以上の学生が「社会力」を実感することができている。「どちらでもない」とした回答者は22%、「社会力はつかなかった」とした回答者は16%であった。

学年別に見てみると、「社会力がついた」とした回答者の割合は実践科目Aが67%と最も高く、次いで実践科目Bが56%、実践科目Cでは54%となっている。(図6)

活動の段階が進むにつれ(学年が上がるにつれ)、「社会力がついた」とする回答者の割

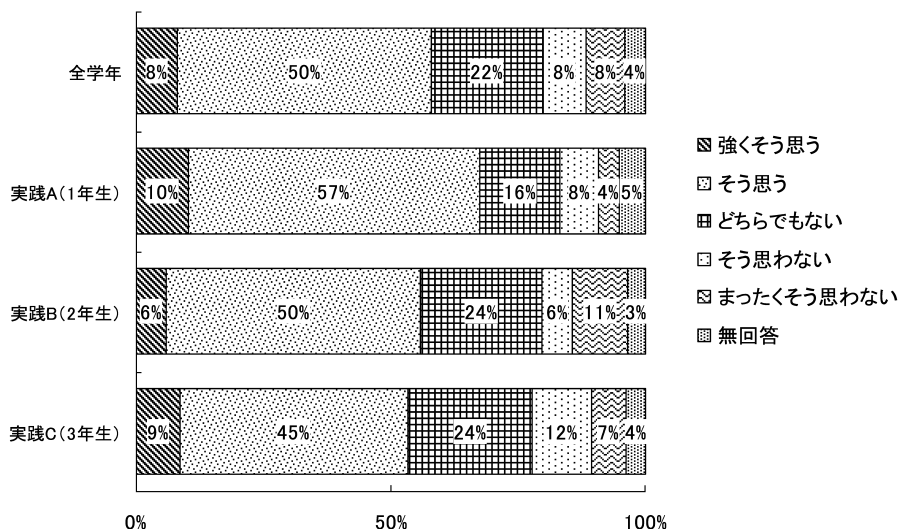


図6 社会力がついたかの意識

合が下がってきている結果となった。

5. 2 アルバイトについて (図7～9)

平成18年度調査では、学生の半数がアルバイトをしていることがわかっており、「アルバイトを通して「社会力」をつけることができる」という内容の回答が多く見られた。平成19年度調査でも、学生の60%がアルバイトをしていることがわかっている。そこで実践科目とアルバイトの特色、及びそれらの相異と相関を明らかにすることを目的とし、「実践科目で得られたもの」と「アルバイトで得られるもの」の比較調査を行った。

「アルバイトを通して得られたもの」を問い、回答方式、選択肢は「実践科目の活動を通して得られたもの」と同一のものを適用した。

結果として、全学年で

- ①技能・能力：「常識・社会マナー」(20%)・「挨拶・敬語」(18%) (図7)
- ②精神面：「責任感」(24%)・「忍耐力」(21%) (図8)

- ③コミュニケーション：「新しい友達」(17%)「普段関われない人との出会い」(16%)・が上位に回答された。(図9)

学年別の回答の傾向に大きな違いはみられず、また、技能・能力、精神面では特定の項目に回答が偏ることなどから、アルバイトに対しては、学年差、年齢差、また活動の種類に関わらず、学生がある程度一定及び、共通の意識を持っていると考えられる。

次に、「アルバイトで得られるもの」と「実践科目で得られたもの」を比較してみると、どの分野でも両者の回答の傾向に相違がみられ、学生が、両者を通して得られるものが違うと感じていることがわかる。特に、①技能・能力面での「常識・社会マナー」・「敬語・挨拶」に対する、「状況判断」・「計画を立てる力」、②精神面での「責任感」・「忍耐力」・「仕事の大切さ」に対する、「達成感」・「最後までやり抜く力」はそれぞれ相補的に回答がなされており、アルバイトと実践科目は、お互いを補い合う形で学生の社会的成熟度に影響していることがわかる。

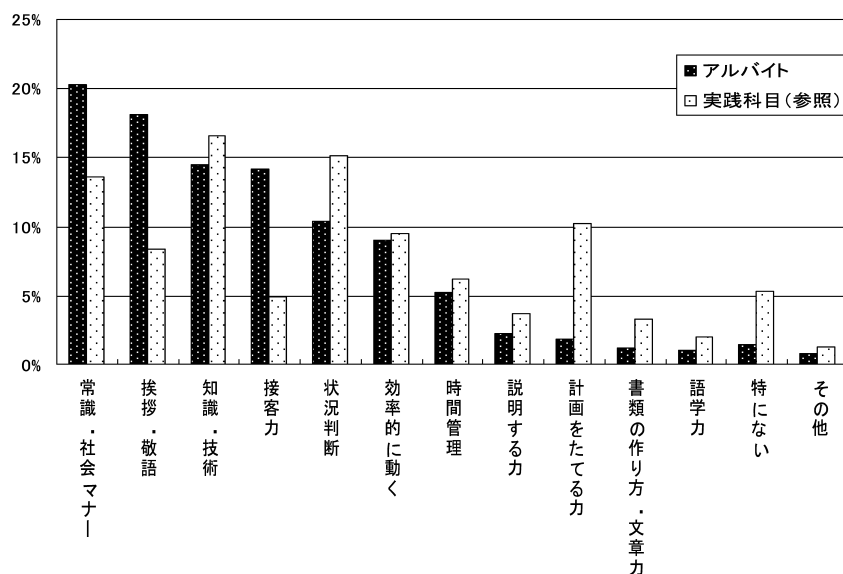


図7 アルバイトで得られるもの ①技能・能力

一方でわずかではあるが、両者の間に結びつきのある点もいくつかあった。

技術・能力面での「時間管理」は、「実践科目で得られたもの」として、実践科目 A から

実践科目 C になるにつれ 3% から 10% に上昇し、「アルバイトで得られるもの」としても、実践科目 A から実践科目 C にかけて、3% から 7% とほぼ同様な上昇がみられる。

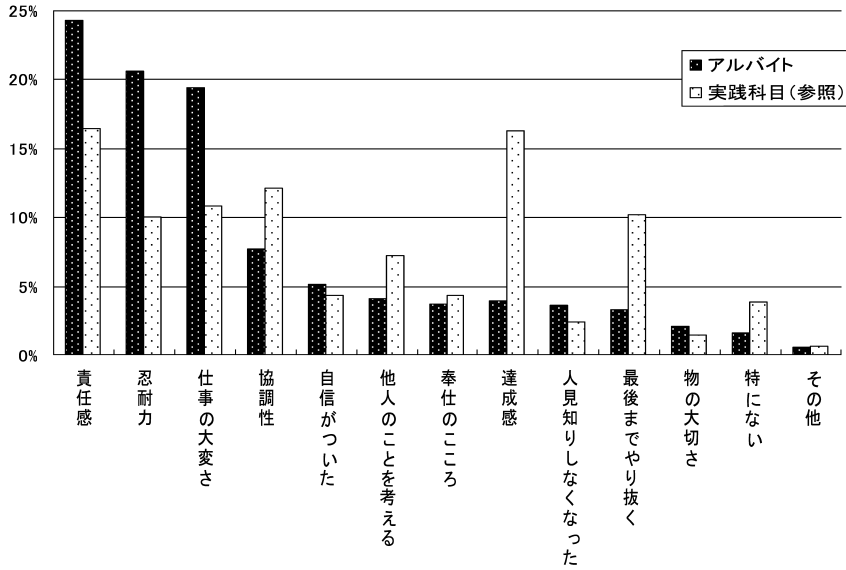


図 8 アルバイトで得られるもの ②精神面

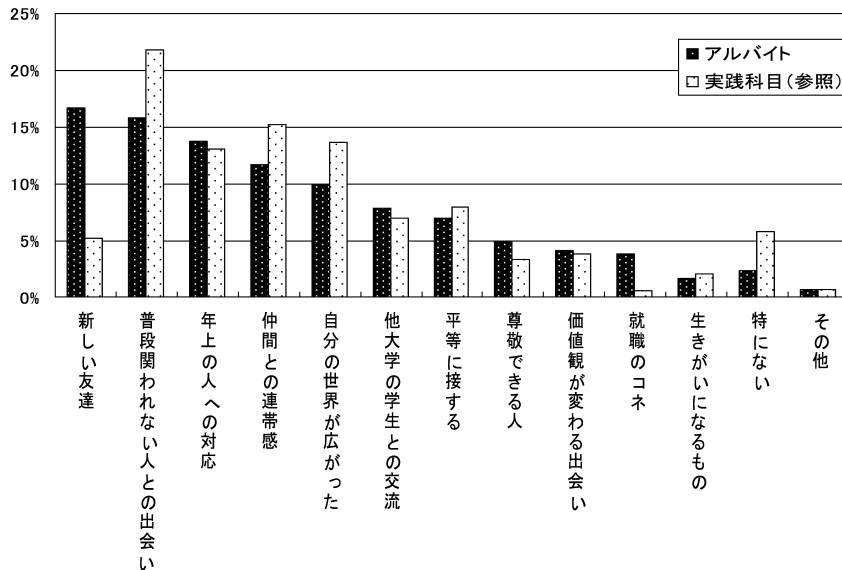


図 9 アルバイトで得られるもの ③コミュニケーション

コミュニケーション面では、「自分の世界が広がった」が実践科目で13%から17%の上昇、アルバイトで9%から12%の上昇がみられる。

いずれも、確実な結びつきとは言えないが、「時間管理」、「自分の世界が広がった」が実践科目Cの活動で多く得られていることに照らし合わせてみると、実践科目での活動が、アルバイトにも影響を及ぼしている可能性は十分に考えられる。

6. 調査結果をうけての考察

調査結果を受けて、OCP 学生スタッフの視点から、改めて OCP の特色と、教育プログラムとして OCP が学生にどのように作用しているのかの考察を行う。

OCP は、3年間のプログラムである。学生は活動を始めるに際して、3年後の自分を思い描き、その自分の姿を目標にしながら活動を進めていくことができる。目標が与えられたものではなく、自らの姿であるということが、学生の活動動機を高める要因となっている。

これは、プログラム全体のビジョンが明確で、且つ「体験する」、「学ぶ」、「試す」という分かりやすいイメージを伴って示されていることによるものである。

1) 段階的なプログラムであることの有効性 (スパイラル(螺旋)型学習)

3年間のプログラムの中で、連続直線的に力をつけていくことで目標達成を目指すのではなく、実践科目 A・B・C の各段階を進んでいくことで、段階的に目標とする力をつけていくことが特色のひとつである。これによって、①活動の核となる目標を段階ごとに定めるので、活動の方向性が定まる。②段階ごとに達成感を得ることで成功体験となり、次の活動への動機付けに繋がる。③同時に、

段階ごとにフィードバックを得ることで、自身の行動と目標に修正を加えながら次の活動に移ることができる。

また、段階的な上昇は、「社会力」を中核として螺旋的になされていると考えられる。活動に対して一定の満足度がありながら、学年が上がるにつれ、「社会力がついた」とした回答者の割合が下がることから、活動を通して感じた「社会力」は、次の段階の活動では、すでに自らに定着しつつある力であり、改めて「得られた力」と認識しなくなるまでに深化していると推測できる。このように、各段階で目標にしたこと、得られたことを自らの考える「社会力」と対比させ、それらを自らの力として定着させながら、さらに「社会力」を深く考えることで活動が進んでいる。(図10)

2) 中・長期的な活動であることの有効性

1年毎に1段階を進む、計3年間の中・長期的な活動であるため、各段階で活動のふりかえりが十分に行われる。また、結果的に、大学生活の中に活動が組み込まれる形となるので、ふりかえりを日常の中に反映しやすく、これによって活動を通して得た力が定着しやすい。学生としての、専門の学習が進むこととも関連し、学業と OCP 活動との良い関係性が保たれる。

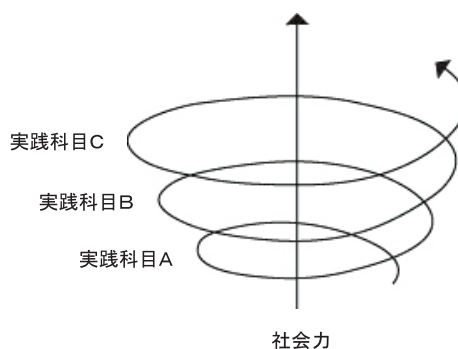


図10 螺旋的な上昇

3) 必修科目であることの有効性

活動を3年間の必修科目としたことで、活動に対する動機付け⁹⁾に変化を及ぼしている。

実践科目Aは、主に、必修科目という外発的動機付けによって活動が行われている。実践科目Bでは、外発的動機付けに、より興味のある・自分のためになるといった自律性が高まって、自律性の高い外発的動機付けによって活動が行われている。実践科目Cになると、自律性はより高まり、内発的動機付けによるものとはほぼ同様の活動を行っている。これは実践科目Cで、失敗や、過程からも学ぶ姿勢が多く見られることからもうかがえる。

この変化を確実なものにしているのは、各段階でのふりかえりであり、活動を通しての様々な発見に対して、担任・社会力コーディネーターへの報告→活動報告書の作成→活動発表という体系的なふりかえりが行われることで、活動の意義に自発的な思考が生まれている。

また必修科目として全段階に外発的動機付けを与えたことで、自発的な思考や、達成感を一過性のものとせず、「前活動以上の成果を目指す」など、常に自律性を高めていくことに繋げるきっかけとなっている。その結果、最終的には、内発的動機付けとほぼ同様のものによって活動が行われることとなる。(図11)

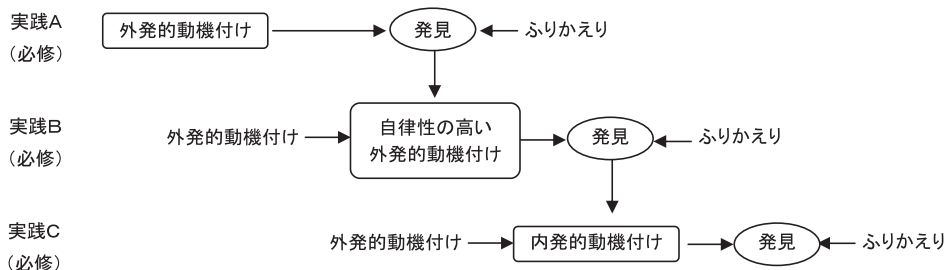


図11 活動の動機付けの変化

7. 調査結果をうけてのプログラムへの反映～社会力コーディネーターの視点から～

OCP学生スタッフによる意識調査は、学生と受け入れ団体の橋渡し役を担う社会力コーディネーターがプログラムの推進方法を見直し、実行するに当たり、非常に参考にすべきものであることは言うまでもない。意識調査の結果や考察を受けてOCP推進室や社会力コーディネーターはOCPのさらなる改善のための検討を行い、平成19・20年度の活動では以下の点で強化・改善を行った。

1) 学生自身による受け入れ団体の選択

平成18年度調査では、「友達に誘われて活動を選んだ学生の満足度が低かった」という結果が出た。これを受けて社会力コーディネーターは、OCPが多くの受け入れ団体からの協力を受ける中で、学生が活動を行う団体の決定に当たり積極的にアドバイスは行うものの、最終判断は学生自身が下すことを徹底した。そのことにより学生自身の活動に対する責任感をより強め、結果、活動後の達成感の上昇に繋がった。

2) 明確な目標設定とふりかえりの充実

平成18年度調査では、「何のためにこのような活動を行うのか分からない」という意見が少数あった。このため、学生に何のために

OCP を行うのかをより強く意識させるために、明確な目標設定とふりかえりの充実を図った。目標設定を明確化することで、学生に常に活動に対して核となる意識、すなわち目標を持たせ、また、その目標に対するふりかえりを少なくとも中間時と終了時の2回は全学生に対して行うことで、自己内省を図るとともに、OCP の意義を再認識し、活動自体の社会的意味を考え、整理する機会を持つことに繋げた。

また、平成19年度からふりかえりの場に OCP 学生スタッフに参加してもらうことで、従来の参加者と社会力コーディネーターのみのふりかえりではなく、先輩からの指摘やアドバイスも入れたふりかえりも試みている。まだ明確な効果は出ていないが、学生にとっては先輩のアドバイスやコメントを通じた学びの深化とふりかえりの場を通じた予期せぬ「先輩との出会い」を提供し、OCP 学生スタッフにとっては学生の生の声を吸い上げる機会としても、また、自身の体験を改めてふりかえる機会としても大きな効果が期待できる。

3) 担任教員からのフィードバック

平成19年度調査の報告に伴って、OCP 学生スタッフから、「学生が行ってきた活動を様々な人から認めて（褒めて）もらうことが大切である」という提案もなされた。これは、OCP 学生スタッフの実際の活動を通して、社会力コーディネーターからのフィードバックやふりかえりのみならず、1年生、2年生の単位認定者となっている担任教員からもフィードバックを受けることで、さらに学生が自身の活動を認めてもらい、自己内省や自信に繋げるのではという実感に基づいての提案である。これを受けて、平成19年度から学生が提出する最終報告書に担任教員から学生に対するコメント欄を設けた。

4) オリエンテーションへの OCP 学生スタッフの参加

OCP は全学生が社会参加活動を必修科目として行うために、学生が学外に出る前に OCP の意義を理解し、動機付けを図ることが不可欠である。そのために、OCP のプログラムを実際に体感し、意義を感じてきた OCP 学生スタッフに先輩として、その意義や実際に経験してきた活動について説明してもらうことが、これから活動を始める学生の動機付けを高めるためには非常に有効であることが分った。そこで、オリエンテーション時には必ず OCP 学生スタッフからの発表の時間を設け、直接上級生の視点から下級生に説明をしてもらうこととしている。

OCP 学生スタッフによる意識調査は、プログラムの実施者である大学ではなく、実践者である学生自身が学生に対してアンケートを取り、データ分析や学生の視点からの提言を行っている点で意義深いものである。このわずか2年だけでも、OCP 学生スタッフから前章に挙げられたようなプログラム改善に繋がる提言を受けた。

今後も継続して意識調査を実施することで、OCP 学生スタッフが学生の視点からプログラムをより良くするための提言を行い、改善に寄与していくことが、OCP という本学の意義あるユニークな取組を深化させるための大きな役割を担っていると感じてやまない。

そして、OCP 学生スタッフが、OCP という教育プログラムにおいて、オリエンテーションやふりかえりという場面を通して先輩として直接学生と向き合い、働きかけていくことが、学生の動機付けを高め、ひいてはプログラムの改善を図るために今後ますます重要になってくるものと考えている。

8. 課題と展望

調査結果から、OCPの独自性と教育プログラムとしての有効性が確認できた。一方で、OCPの今後の在り方として、学生の専門性の育成とのバランスをどのように扱っていくのかを考えていくことが課題のひとつである。

上述したように、OCPの活動においては、活動前と、活動後で動機付けに大きな変化があり、学生はそれを実感することで、自らの成長を知ることとなる。学生にとって、馴染みがなかった分野、よく知らなかった分野での活動であるほどその影響は大きい。「なんとなく」と始められた活動が、3年間のプログラムを経た後も継続され、より意欲的に活動が行われていたり、学生によっては、進路にも少なからず影響を与えていることもある。また、活動を卒業研究のテーマとして取り上げている学生も多くみうけられる。

一方で、活動を選ぶ際に、自分の専門性をより高めていくことを目的とした学生の、活動終了後の満足度があまり高くないという傾向がある。平成19年度調査では、「活動の感想」別での回答の比較を行ったのだが、「つまらなかったし、プラスにもならない」と感想を持った学生の活動を選んだ理由に、「知識・技術を身に付けたい」、「得意分野だから」が他の感想を持った学生に比べ多く回答されていることが分かった。自由記述からは「やらされることが簡単すぎる」、「自分のやりたかったことと違っていた」等の回答がみられ、限られた活動時間や、受け入れ団体の学生に対する認識から、活動や作業レベルが限定され、結果的に、すでに同じ活動の経験のある学生や、知識・技術等の向上を目的とした学生の、活動の期待に対して、満足度が伴わなかったと考えられる。

この対応として、OCPは技術を伸ばす場ではないとし、「自分との関わりが薄い分野」

での活動を推奨することも考えられるが、現在までの観察では、3年間のプログラムの中での意識の上昇に伴って、活動についての知識や技術、またはそれに対する興味が、確実に上昇していることを考えると得策とは言えない。

現実的な対応としては、プログラムを、専門性を持った教員や授業と連携させ、さらに同じ分野で活動を行った上級生やOBをアドバイザーとすることである。それにより、専門性を高めていくことへの具体的なフォロー・アップが行われることで、オフ・キャンパスで活動を行うことの意義と目的がより明確となる。このように多重的な対応がなされることで、専門性の向上に伴った「社会力」の育成を行うプログラムとして機能するのではないだろうか。

OCPは今後、様々な形への発展が期待できる教育プログラムであると考えている。

9. おわりに

OCPは、オフ・キャンパスで、学生一人ひとりの「社会力」を育成するためのプログラムであるが、一方で、大学内（オン・キャンパス）での新しい人間関係の構築を行うという機能的な側面も持ち始めている。それは、「同じ活動を行ったものと友達になる」などの、同学年内のことにとどまらず、すでに同じ活動を行った上級生と、これから活動を行う下級生が活動を通して知り合うなど、学年の枠を飛び越えたものとなっている。学生にとって、そのような人間関係が、活動で得られた力と同等に貴重であることは言うまでもない。

また、学生同士にとどまらず、学生と教職員、そして教職員同士がプログラムを通して結びつきを強めることで、プログラムは安定度を増し、さらには大学全体の活性化に繋がっていくことになる。

多様な面において、OCP は教育プログラムの枠を超えて、地域社会、大学、また卒業生までも巻き込んで、有機的な発展を遂げていくことになるだろう。

OCP から巣立っていった学生が、受け入れ団体や、アドバイザーとして OCP に帰ってくる日が待ち遠しい。

注

- 1) 門脇厚司筑波学院大学初代学長の造語であり、門脇 (1999) では「社会を作り、作った社会を運営しつつ、その社会を絶えず作り変えていくために必要な資質や能力」と定義されている。
- 2) 詳細は、西機・武田 (2007)、吉田・豊田・金久保 (2007)
- 3) 詳細は、金久保・馬場 (2008)
- 4) OCP プログラムでは、実践科目 A (1 年生)、実践科目 B (2 年生)、実践科目 C (3 年生) として 1 年次から 3 年次まで段階的に社会参加活動を行う必修科目の授業がある。詳細は、吉田・豊田・金久保 (2007)
- 5) OCP プログラム推進のため OCP の授業のやり方や内容の改善などについて協議し、実行することを目的とした教員組織である。詳細は、吉田・豊田・金久保 (2007)
- 6) 学内の教職員だけでは難しい学外の団体との交渉や、ネットワークづくりをするコーディネーターである。OCP 推進室に常駐している。詳細は、西機・武田 (2007)
- 7) 詳細は、金久保・馬場 (2008)
- 8) 実践科目で活動を行う学生を受け入れている

団体、また受け入れの体制がある団体、詳細は、西機・武田 (2007)

- 9) 学習の動機付けにおいて、その活動や勉強自体がおもしろいからするといったタイプの動機付けを内発的動機付けとよぶ。学習者の外側から与えられる賞や罰によって学習へと向かわせるタイプのものを外発的動機付けとよぶ。詳細は、浦上 他 (2008)

参考文献

- 浦上昌則・神谷俊次・中村和彦 (2008) 「心理学 Introduction to Psychology」ナカニシヤ出版
- 門脇厚司 (1999) 「子どもの社会力」岩波新書
- 金久保紀子・馬場 裕 (2008) OCP 学生スタッフの取り組み - 立ち上げから現在まで - 『筑波学院大学紀要』第 3 集 pp.181~193 筑波学院大学
- 武田直樹・西機 真 (2008) 「筑波学院大学オフ・キャンパス・プログラムの成果と今後の課題」『筑波学院大学紀要』第 3 集 pp.169~179 筑波学院大学
- 西機 真・武田直樹 (2007) 「筑波学院大学オフ・キャンパス・プログラムにおける社会力コーディネーターの試み」『筑波学院大学紀要』第 2 集 pp.195~204 筑波学院大学
- 野崎耕一・後藤俊夫 (2006) 「大学生の成長の考察」静岡産業大学情報学部研究紀要
- 吉田真澄・豊田一男・金久保紀子 (2007) 「オフ・キャンパス・プログラム (Off Campus Program) のあらまし」『筑波学院大学紀要』第 2 集 pp.205~213 筑波学院大学

OCP 学生スタッフによる実践科目アンケート

筑波学院大学学生各位

このアンケートは OCP (オフキャンパスプログラム) と実践科目に対するみなさんの率直な感想や意見を OCP 学生スタッフが聞くことで、実践科目の活動をより充実させ、OCP を向上させることを目的としています。

答えていただいた内容は、すべて統計的に処理され、個人に関わるデータは公表されることはありませんので、自由な感想・意見を聞かせて下さい。また、このアンケートは成績には一切関係ありません。

筑波学院大学 OCP 学生スタッフ

実践科目 B

所属学科に○をつけて下さい。 1. 情報メディア 2. 国際交流

1. 実践科目の活動はどうでしたか？ ひとつ選んで○をつけて下さい。

1. 楽しかったし、何か得たものがあった
2. 楽しかったが、自分にプラスにはならなかった
3. 楽しくはなかったが、何か得たものがあった
4. つまらなかったし、自分にプラスにもならなかった
5. その他 ()

その理由は何ですか？ 自由に記述して下さい

[]

2. 実践科目での活動を選んだ理由はなんですか？

3つまでを選んで番号を記入して下さい。

- | | |
|---------------------|-------------------------|
| 1. 得意な分野だったから | 9. 技術や知識などを身に付けたいから |
| 2. 体験したことのない分野だったから | 10. 社会力コーディネーターに勧められて |
| 3. 興味がある分野だったから | 11. 担任(指導教員)に勧められて |
| 4. 自分のためになる経験ができるから | 12. 簡単そうだったから |
| 5. 友達に誘われて | 13. もともと活動に携わっていたから |
| 6. 挑戦してみたい活動だったから | 14. 活動場所・時間が自分の条件にあったから |
| 7. 就職に結びつきそうだから | 15. 自分の新しい一面を見つけたかったから |
| 8. 楽しそうだったから | 16. その他 |

()

① _____ ② _____ ③ _____

3. 実践科目で何を得たと感じますか？

各カテゴリーで3つまでを選んで番号を記入して下さい。

●技術・能力

- | | |
|-----------------------|-----------------|
| 1. 知識・技術を得ることができた | 8. 計画を立てる力がついた |
| 2. 常識・社会マナーが身についた | 9. 時間を管理する力がついた |
| 3. 挨拶・敬語の使い方を学べた | 10. 語学力がついた |
| 4. 状況を判断する力がついた | 11. 接客力がついた |
| 5. 書類の作り方・文章力が向上した | 12. 特にない |
| 6. 効率的に動くことができるようになった | 13. その他 () |
| 7. 説明する力がついた | |

① _____ ② _____ ③ _____

●精神面の成長

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1. 忍耐力がついた | 8. 仕事の大変さがわかった |
| 2. 責任感がついた | 9. 最後までやり抜くことができた |
| 3. 自分に自信がついた | 10. 他人のことを考えられるようになった |
| 4. 達成感を得られた | 11. 人見知りしなくなった |
| 5. 奉仕の心がわかった | 12. 特にない |
| 6. 協調性の大切さがわかった | 13. その他 () |
| 7. 物（食べ物・服など）の大切さがわかった | |

① _____ ② _____ ③ _____

●コミュニケーション

- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1. 新しい友達ができただ | 8. 仲間との連帯感を得られた |
| 2. 他大学の学生との交流ができただ | 9. 生きがいになるものを得られた |
| 3. 尊敬できる人・目標になる人と出会った | 10. 就職につながるコネクションを得られた |
| 4. 普段関わることのなかった人との出会った | 11. 誰にでも平等に接することの大切さ |
| 5. 価値観が変わるような出会った | 12. 特にない |
| 6. 年上の人への対応、配慮を学べた | 13. その他 () |
| 7. 自分の世界が広がった | |

① _____ ② _____ ③ _____

4. 実践科目の活動で困ったことはありましたか？

該当するものに○をつけて下さい。(複数回答可)

- | | |
|--------------------------------------|-------------------------|
| 1. 交通費などの出費 | 9. 約束と違うことが多かった |
| 2. 慣れない環境や作業で体調をくずした | 10. 計画通りに活動が進まなかった |
| 3. 活動先までの交通手段が少ない・ない | 11. 受入れ先での対人関係 |
| 4. ただ働きの人材として使われた | 12. 自分が考えていた活動と違っていた |
| 5. 活動時間が授業や他の学内活動と重なる | 13. 環境が悪かった(暑い、寒い、汚いなど) |
| 6. 活動時間が不定期で予定が立てられない | 14. 受入れ先で意見が食い違うことがあった |
| 7. 専門的な知識が必要で、活動について
いけなかった | 15. 敬語がうまく使えなかった |
| 8. 担当者の指示がわかりにくく、何をして
いいのかわからなかった | 16. 社会マナーに関して注意された |
| | 17. 特にない |
| | 18. その他 () |

5. 実践科目を通して「社会力」がついたと思いますか？

ひとつ選んで○をつけて下さい。

1. 強くそう思う
2. そう思う
3. どちらでもない
4. そう思わない
5. まったくそう思わない

6. 実践科目を終えた後の活動の継続についてお尋ねします。

ひとつ選んで○をつけて下さい。

1. 今でも活動を継続している
2. 条件が合えば継続したい
3. 同じ分野で、違う活動をはじめたい
4. 違う分野で活動をはじめたい
5. もうやりたくない

7. 実践科目での活動を終えて自己評価をお願いします。

5段階評価で該当する番号に○をつけてください。

	1	2	3	4	5		
	できなかった				よくできた		
1) 社会マナー（挨拶・礼儀）を守り、敬語が適切に使えた			1	2	3	4	5
2) 目標を掲げ、目標達成に向かって活動することができた			1	2	3	4	5
3) 社会力コーディネーター又は、担任からの連絡に迅速に対応した			1	2	3	4	5
4) 受入れ団体からの連絡に迅速に対応した			1	2	3	4	5
5) 約束や契約をきちんと守った			1	2	3	4	5
6) 活動申請をきちんとして活動を行った			1	2	3	4	5
7) 必要書類等の作成・提出を迅速に行った			1	2	3	4	5
8) 目標にしていた成果をあげることができた			1	2	3	4	5
9) 活動に対して達成感を得ることができた			1	2	3	4	5

8. プログラム内容についての評価をしてください。

5段階評価で該当する番号に○をつけてください。

	1	2	3	4	5		
	そう思わない				そう思う		
1) 合同説明会やガイダンスなどで、自分が活動したい団体の必要な情報は得られた			1	2	3	4	5
2) 社会力コーディネーターの対応や指示は適切であった			1	2	3	4	5
3) 担任による実践科目の授業はわかりやすかった			1	2	3	4	5
4) 活動前の事前研修(日本語・マナー)は役に立った			1	2	3	4	5
5) 活動直前の三者面談は適切であった			1	2	3	4	5
6) 活動団体を選ぶ上で社会力コーディネーターのアドバイスは役に立った			1	2	3	4	5
7) 社会力コーディネーターとの「ふりかえり」は役に立った			1	2	3	4	5

9. あなたは今アルバイトをしていますか？

どちらかに○をつけて下さい。

1. している
2. していない

「している」と答えた方

具体的にどんなアルバイトですか？ 簡単に記述してください。

〔 _____ 〕

10. アルバイトを通して得られることは何だと思いますか？

(アルバイトをしていない方も考えられる範囲で教えてください。)

各カテゴリーで3つまでを選んで番号を記入して下さい。

●技術・能力

- | | |
|-----------------------|-----------------|
| 1. 知識・技術を得ることができた | 8. 計画を立てる力がついた |
| 2. 常識・社会マナーが身についた | 9. 時間を管理する力がついた |
| 3. 挨拶・敬語の使い方を学べた | 10. 語学力がついた |
| 4. 状況を判断する力がついた | 11. 接客力がついた |
| 5. 書類の作り方・文章力が向上した | 12. 特にない |
| 6. 効率的に動くことができるようになった | 13. その他 () |
| 7. 説明する力がついた | |

① _____ ② _____ ③ _____

●精神面の成長

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1. 忍耐力がついた | 8. 仕事の大変さがわかった |
| 2. 責任感がついた | 9. 最後までやり抜くことができた |
| 3. 自分に自信がついた | 10. 他人のことを考えられるようになった |
| 4. 達成感を得られた | 11. 人見知りしなくなった |
| 5. 奉仕の心がわかった | 12. 特にない |
| 6. 協調性の大切さがわかった | 13. その他 () |
| 7. 物（食べ物・服など）の大切さがわかった | |

① _____ ② _____ ③ _____

●コミュニケーション

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1. 新しい友達ができただ | 8. 仲間との連帯感を得られた |
| 2. 他大学の学生との交流ができただ | 9. 生きがいになるものを得られた |
| 3. 尊敬できる人・目標になる人と出会った | 10. 就職に繋がるコネクションを得られた |
| 4. 普段関わることのなかった人との出会った | 11. 誰にでも平等に接することの大切さ |
| 5. 価値観が変わるような出会った | 12. 特にない |
| 6. 年上の人への対応、配慮を学べた | 13. その他 () |
| 7. 自分の世界が広がった | |

① _____ ② _____ ③ _____

11. あなたは実践科目、アルバイト以外の学外活動をしていますか？

どちらかに○をつけて下さい。

1. している
2. していない

「している」と答えた方

具体的にどんな活動ですか？ 簡単に記述してください。

[

]

12. OCP に対して要望や意見がありましたら自由に書いてください。

ご協力ありがとうございました。

みなさんの意見をもとに、より活動しやすい OCP を目指します。

筑波学院大学 OCP 学生スタッフ